

令和 3 年 6 月 19 日現在

機関番号：31104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K10206

研究課題名(和文) 社会的スキル訓練の技法を用いたコミュニケーション教育プログラムの効果に関する検討

研究課題名(英文) Research on the effects of a communication education program using social skills training

研究代表者

阿部 智美 (ABE, Tomomi)

弘前学院大学・看護学部・准教授

研究者番号：70347201

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、社会的スキル訓練(Social Skills Training)の技法を用いた看護学生のコミュニケーション教育プログラム(課題提示型、場面検討型)の評価を行うことを目的とした。課題提示型では、質問紙調査から基礎看護学実習でのコミュニケーション冊子の有用性と課題を検討した。冊子の一部を改訂した。場面検討型では、基本訓練モデルを用いたコミュニケーション教育の評価を計画したが、参加者が不足し中止とした。そのため、参加した数名の看護学生のグループインタビューから、効果や課題、改善点、活用について検討した。コミュニケーション教育の手引書の見直しを行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、これまでの研究成果を活用し、基礎看護学実習でのコミュニケーション冊子を作成した。質問紙調査から冊子の有用性が明らかとなった。学生の要望や学習状況を踏まえて、冊子の改訂を行った。基本訓練モデルを用いたコミュニケーション教育の評価は、参加者数の不足や感染症の拡大により実施できなかった。しかし、今後の活動に繋げるため、参加者からの今後の活用や改善点についての意見を得て、手引書の見直しを行った。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to evaluate a communication education program using social skills training (task presentation type and scene examination type) for nursing students. In the task presentation type, we examined the usefulness and problems of communication booklets in Fundamental Nursing Practice Class through the analysis of questionnaire data and revised some parts of the booklets. In the scene examination type, we planned to evaluate the communication education program using the basic training model, but canceled it due to lack of participants. Therefore, we examined its effects, tasks, points of improvement, and utilization from group interviews of several nursing students who participated in our study, and reviewed the procedure manual for communication education.

研究分野：看護学

キーワード：コミュニケーション ソーシャルスキルトレーニング(SST) 看護学生

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年、看護学生のコミュニケーションスキルの向上が求められている。看護では対象者や家族とのコミュニケーションを通して信頼関係を築き、ニーズを把握して援助を行う。その他に、チーム医療や地域包括ケアの推進に伴い、多職種との円滑な連携能力も求められている。

しかし、看護学生は実習で対象者とのコミュニケーションや看護師への報告等を難しいと感じることも多い。その理由として、対象理解の不足、対応方法がわからない等が挙げられている。看護師への報告においても知識や判断力の不足から、困難さを感じている。

そこで、本研究ではそのような課題を解決するために、社会的スキル訓練 (Social Skill Training 以下、SST と略記する) の技法を用いた看護学生のコミュニケーション教育プログラムが有用ではないかと考えた。SST は行動療法や社会的学習理論に基づいた対人関係スキルの訓練である。そのため、SST で用いる技法は、モデリングやロールプレイでのリハーサル、フィードバック等を組み合わせ、主にグループで行われる。SST の効果として、コミュニケーションスキルの向上以外に、ストレスの低減、学校や社会生活の適応等が報告されている。日本では、当初、SST は精神科領域で導入されていたが、現在、通常教育の授業にも用いられている (西園編著 2009)。

SST の実践方法にはいくつかのタイプが考案されている。本研究で用いる SST は、学習者へ練習課題を提示する典型的なトレーニング方法を基にしたもの (以下、課題提示型とする) と、学習者の希望や問題意識に沿いながら練習をすすめる基本訓練モデルを基にしたもの (以下、場面検討型とする) とし、この2つに焦点を当てて行うこととした。

これまで、コミュニケーション教育プログラム開発のために、看護学生の学習ニーズと練習が必要なコミュニケーションスキルに関する調査を行い、教育プログラムの検討を重ねてきた。本研究では、これまでの研究成果を引き継ぎ、課題提示型、場面検討型の教育プログラムを企画・実施し、それぞれの介入について評価を行う。

また、評価で得られた知見を活用し、SST の技法を用いた看護学生のコミュニケーション教育プログラムの実践方法を手引き書にまとめる。看護学生を対象とした看護のコミュニケーションに関するテキストは多くみられるが、具体的な練習内容や方法を記載した手引き書は、看護基礎教育のコミュニケーション教育に役立つと考えた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、看護学生を対象とした SST の技法を用いたコミュニケーション教育プログラムの評価 (課題提示型、場面検討型) を行うことである。また、SST の技法を用いたコミュニケーション教育プログラムの実践方法を手引き書としてまとめることで、その実践を教育現場に取り入れやすいものにしていくこととした。

### 3. 研究の方法

#### 1) 冊子を活用したコミュニケーション教育 (課題提示型)

2018 年に実施した質問紙調査から基礎看護学実習でのコミュニケーション冊子の有用性と課題を検討した。

##### (1) コミュニケーション冊子の作成

これまで実施してきた学習ニーズや練習スキルの調査をもとに、初めて実習をする看護学生 (1 年生) を対象としたコミュニケーションに関する冊子「初めての実習でのコミュニケーション」を作成した。冊子は、主に患者とのコミュニケーション (挨拶、コミュニケーションの開始、終了等) 実習場でのコミュニケーション (挨拶、報告・相談、カンファレンス等) から構成され、具体的なコミュニケーションの例を記載した。

##### (2) 質問紙調査からの評価

コミュニケーション冊子は実習前に配布して、その説明を行った。実習を終了した学生を対象に、実習でのコミュニケーション状況や冊子を用いて良かったところ・要望を尋ねる質問紙調査を行った。質問項目は「患者さんとのコミュニケーション」「実習場でのコミュニケーション」について「できたところ」と「できなかったところ」、「良かったところ」と「要望」を尋ねた。分析では、質問紙の質問項目ごとの自由記述を意味内容の類似性から判断し、カテゴリーにまとめた。

#### 2) 基本訓練モデルを用いたコミュニケーション教育 (場面検討型)

評価のために、看護学生 (3 年生) を対象に基本訓練モデルを用いたコミュニケーション教育を行い、参加者を介入群、非参加者を対照群として、質問紙調査による前後比較を行う研究計画を作成した。しかし、参加者数が不足し計画を中止した。そのため、SST に参加した数名の看護学生 (4 年生) から得られた意見を活用して研究計画の見直しを行い、新たな参加者の募集に繋げることとした。

##### (1) コミュニケーション教育の研究計画

基本訓練モデルを用いたコミュニケーション教育を 3 回 (各回でテーマを設定) 実施し、質問紙調査からコミュニケーションスキルや適応感等をアウトカムとして介入の前後比較を行い、実習期間にコミュニケーション教育に参加して役立ったことや要望等についてグループインタビューを行うこととした。

## (2) SSTに関するインタビュー調査

看護学生(4年生)を対象に基本訓練モデルを用いたコミュニケーション教育に参加してもらい、グループインタビューから SST の効果や課題、改善点、活用について意見をj得る。さらに、得られた意見を活用して、参加者(2年生)の募集を行い、基本訓練モデルを用いたコミュニケーション教育の参加者の募集に繋げることとした。

## 4. 研究成果

### 1) 冊子を活用したコミュニケーション教育(課題提示型)

#### (1) 質問紙調査からの評価

質問紙調査では、実習終了後、73名に質問紙を配布し、47名から回答を得た。質問紙の記述には、冊子の「患者さんとのコミュニケーション」「実習場でのコミュニケーション」で、良かったところで共通したカテゴリーは【例の記載】【読みやすさ】【説明の記載】【役立つ】であった。一方、要望で共通したカテゴリーは【これからも必要】であった。要望で相違がみられたカテゴリーは「患者さんとのコミュニケーション」では【話題に関する記載】【援助に関する記載】【言語障害に関する記載】【読みやすさ】で、「実習場でのコミュニケーション」では【報告例の記載】【NG例の記載】であった。

冊子の評価については、学生が知識や判断力を活かし、対象や状況に応じて、緊張をコントロールして、適切にコミュニケーションをとるためには、冊子だけでは不足すると考える。学生ができなかったと捉えていたのは患者との会話のやりとりや看護師への報告が多く挙げられていた。看護学生は未だ学習途中で、知識や経験も少ないため、緊張が強く、対象や状況に応じたコミュニケーションをとることが難しいこともあると考える。コミュニケーション能力を高めるためには、学生の学習状況やコミュニケーションプロセスに視点を置いた支援が必要であると考えた。

#### (2) コミュニケーション冊子の改訂

コミュニケーション冊子は、初めて実習をする学生(1年生)を対象に2018年に作成されてから、学生の要望を取り入れ、報告例を追加する等、記載内容を改訂している。さらに、初めて看護過程を展開する実習を行う学生(2年生)を対象に、情報収集や援助場面でのコミュニケーション、バイタルサイン測定後の報告例等を追加し、学生状況に応じて記載内容を改訂しながら、継続して冊子を使用している。

### 2) 基本訓練モデルを用いたコミュニケーション教育(場面検討型)

#### (1) コミュニケーション教育の研究計画

基本訓練モデルを用いたコミュニケーション教育の評価のため、1回目のベースラインの質問紙調査と介入群の参加募集を行った。しかし、調査に必要な参加者数が集まらなかった。そのため、一旦、実施を中止し、研究計画の見直しを行うこととした。

#### (2) SSTに関するインタビュー調査

研究計画の見直しのため、看護学生(4年生)4名に基本訓練モデルを用いたコミュニケーション教育に参加してもらい、グループインタビューを行った。その結果、SSTの効果として非言語的コミュニケーションが学べ、いろいろな視点から考えることができる等の意見が挙げられた。今後の活用として実習前や実習後での実施について意見が得られた。しかし、課題や改善点としてSSTはイメージしにくいいため、SSTの紹介方法の工夫や、参加者の募集の際に具体的な困難場面を提示する等、参加のきっかけになるような工夫について提案が得られた。その後、学生から得られた提案を活かし、動画を用いてSSTを紹介し、2年生を対象とした企画の実施に繋げた。

#### (3) 基本訓練モデルを用いたコミュニケーション教育の紹介

2020年度は新型コロナウイルスの感染拡大で、基本訓練モデルを用いたコミュニケーション教育は、グループで行われることから感染の危険を避けるため、予定していた2年生を対象とした企画を中止した。

しかし、コミュニケーション教育の企画は中止となったが、介護・福祉系の雑誌や大学での教員紹介・出張講義紹介の冊子で、基本訓練モデルを用いたコミュニケーション教育について紹介する機会を得た。今後の感染の収束状況に応じて活動が再開できた時に使用できるように手引書の見直しを行った。

## <引用文献>

西園昌久編著、SSTの技法と理論 さらなる展開を求めて、金剛出版、2009

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 阿部智美	4. 巻 22 (5)
2. 論文標題 ソーシャルスキルトレーニングの技法を用いたコミュニケーショントレーニングの試み	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 66-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部智美 石田萌 幸山靖子	4. 巻 14
2. 論文標題 基礎看護学実習でのコミュニケーション冊子の有用性と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 弘前学院大学看護紀要	6. 最初と最後の頁 15-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------